

安部公房『鴉沼』論 —帝国と植民地の間で揺らぐテキストの意味合い—

The Ambivalence in the Text between Empire and Colonies in Abe Kōbō: "Karasu numa"

解 放

Abstract

This study focuses on Abe Kōbō's short story "Karasu numa"(1948) and shows that the characters' acts of adultery suggest a complex relationship between the colony and the empire. The representation of the colony and empire is inseparable from the author's own experience of Manchuria and memories of repatriation.

The symbolism of the characters in "Karasu numa" is diverse. The man in the character symbolizes the Japanese soldier and also suggests imperialism. The woman symbolizes the repatriates and at the same time signifies colonialism itself. Therefore, the process by which the man was forced to attack by the Chinese and the destruction of the woman's dwelling reflect the historical events in which Japanese soldiers and civilians were counterattacked by the colonial natives in the immediate aftermath of the war. Furthermore, the fact that the man has been counterattacked by the woman points to another historical fact: the excessive development of colonialism will ultimately lead to the dismantling of imperialism.

Among the diverse experiences of Abe Kōbō, the experience of repatriation is related to the sociological theory of crowds in his novels. "Karasu numa" depicts two crowds, one a group of settlers represented by the woman and the man, and the other a group of Chinese in Manchuria. However, although the two crowds conflict, it is not aimed to extinguish one of the crowds, but rather to work for the survival of the crowd.

Abe Kōbō's mode of thinking is that the repatriates are excluded yet survive without fear of their exclusion. Furthermore, the setting in which female repatriates seduce male repatriates in the text faithfully illustrates the internal breakdown of the repatriate crowd. This paper finds a situation in which the legitimacy of repatriates, who are incompatible with the Japanese on the mainland, is severely questioned.

Keywords

安部公房、『鴉沼』、引揚げ、群衆、姦通

Abe Kōbō, "Karasu numa", Repatriation, Crowds, Adultery

はじめに

日本の戦後文学を代表する作家の一人である安部公房は、『砂の女』(1962)や『他人の顔』(1964)といった、1960年代以降の作品群によって世界に名を知られるようになった。『砂の女』が話題を呼び起こした理由の一つに、小説のタイトルが示している通り、作品の女主人公が呈示する複雑な意味合いが挙げられる。これ以降、フェミニズムやジェンダーの観点から安部作品の登場人物、とりわけ女性登場人物への関心が高まった。しかし、1960年代の作品群における女性登場人物の多様な示唆性と対照に、作家として出発した際、安部作品の女性像は固定したイメージを帯びているように思われる。

安部公房は1946年に引揚げ者として日本へ戻ってから間もなく本格的な創作活動を始

めた。その初期作品において、たとえば『虚構』(1948)という短編小説では、「しかし同時にすべての男にとって姦婦だというのはどうしたわけだろう。だから君は盗人だというのさ」と、女主人公を「姦婦」と称する箇所が散見される⁽¹⁾。留意すべきは、ここでの「盗人」という言葉は、この時期の安部作品では大抵の場合、夫を持ちながら他の男性と関係を持つ、すなわち〈姦通〉という不貞行為を行った女性のことを指しているという点である。この傾向は短編小説『薄明の彷徨』(1948)からも同様の意味で確認できる。「盗人……。おまえか！俺がおまえと結婚したんだって。嘘をつくな、盗人め」にあるように、語り手は不貞の妻を「盗人」と告発している⁽²⁾。ここに挙げられた作品のみでなく、『虚妄』(1948)や『〈友を持つということが〉』(1948)などの同時代の短編小説においても、妻は〈姦通〉行為を行った登場人物として設定されている⁽³⁾。

また、このような女主人公が同時に女性引揚げ者でもある、という設定は注目値する。具体的に例を挙げるならば、『虚妄』という小説の女主人公「K」は次のように描かれている。

とにかくKの主人というのは[……]既に結婚し、社会的にも相当の地位にありながら、やっと女学校を出たばかりのまるで世間知らずな子供にすぎぬ彼女に分別を失い、親子ほども違う年齢も忘れてくどき落とし、前の妻を捨てて上海に渡ったが終戦になって一人の男の子までつくって引揚げて来た。⁽⁴⁾

この引用に、「K」という既婚の女性は引揚げ者でありながら、テキストの別な箇所において、「もっと不作法でもっと懶けものであったら更に沢山の男を永く引きつけておけたらう」と描かれているように、事実上、男性を誘惑する背徳な女性と設定されている⁽⁵⁾。

次に、同時代の『〈歴史の頁が〉』という小説に焦点を当てれば、この作品の冒頭は「それは一隻の使い古され寿命のきた二千トン級のボロ貨物船。[……]満洲から引揚げる千二百人の餓えた難民をつんで長崎に向う途中」という一節から始まっており、引揚げ者の経歴を主に語っている⁽⁶⁾。ここで留意すべきは、この作品の女主人公「ツダ」が、引揚げ船の中の男性を誘惑して、ヒロインの入ったタバコで男を気絶させたのちに、デッキから男たちを海に突き落した悪女であるという点である。「その間ツダはぼんやり笑いつづけていた。[……]みんな一緒に私にかかってくればいいんだわ。そうすればすぐ仲よくなってしまうのに」

(1) 安部公房「虚構」『文学季刊』第8号、1948年11月(『安部公房全集2』新潮社、1997年9月、p.95)

(2) 安部公房「薄明の彷徨」『個性』1949年1月号(『安部公房全集2』新潮社、1997年9月、p.125)

(3) 安部公房の『〈友を持つということが〉』という小説は、題目も署名もなく、『安部公房全集』によれば、この作品は1948年11月8日に書き上げたものとみられる。全集では本文の冒頭部「友を持つということが」の一節を使用して題目としている。

(4) 安部公房「虚妄」(生前未発表)『安部公房全集2』新潮社、1997年9月、p.13。

(5) 同上、p.19。

(6) 安部公房「歴史の頁が」『安部公房全集3』新潮社、1997年10月、p.144(安部公房の『〈歴史の頁が〉』という作品は未完成の作品で、題目も書かれていないために、全集では本文の冒頭部「歴史の頁がめくられようとするとき」の最初の言葉を使用して題目としている。『安部公房全集』によれば、本作は1951年に書かれた。)

とあるように、この女主人公は引揚げ者でありながら、複数の男性を誘惑している⁽⁷⁾。以上の描写より、安部の初期作品において「盗人」と称される女性が同時に引揚げ者でもあることは、この時期の安部作品における一つの傾向と言えるかもしれない。

このように、安部公房の1940年代の作品に登場する女性人物は、明らかに統一された性格を持ち、否定的な眼差しで語られている傾向にある。また、こうした女性像の背景に、安部自身の引揚げ体験を見出すことも可能である。しかし、後ほど述べるように、従来の先行論では『砂の女』をはじめ、安部の60年代の作品における女性像に着目したものは数多くみられるが、40年代の作品の女性像について十分に検討されてきたとは言い難い。本論文では、安部公房の短編小説『鴉沼』(1948)を対象に、登場人物の不貞行為に焦点をあて、このような背徳な行為を行う人物の示唆性と作者の満洲体験や引揚げの記憶との関連性について考証を試みる。

一、〈姦通〉のアレゴリー

『砂の女』に関しては、磯貝英夫が「私たちは、日本の働き者の農村婦人の姿をあざやかに思いうかべないだろうか。[…]戦後文学の持ちえた最もリアルな女性像」と述べているように、婚姻に対する忠誠を誓う女性像を定説とする評価が同時代評にいくつか確認できる⁽⁸⁾。しかし、その後の研究では、『砂の女』の女性像への評価は一転した。鳥羽耕史が「夫と娘に去られた女が、妻と別居していた男を誘惑して失踪させ、新たな夫として獲得するというのが、女の側から見たこの小説の物語になっているように思われる」と指摘しているように、この「女」は男性を誘惑するものとされ、その評価は真逆の方向に進んだ⁽⁹⁾。

この男女関係を破壊する女性のイメージは、『砂の女』のみならず「失踪三部作」の一作でもある『燃えつきた地図』(1967)からもうかがわれる⁽¹⁰⁾。これについては、藤井里菜が『燃えつきた地図』は、女性の台頭を描き、女性の活躍をいち早く認識していたようにも見える。しかし、実際は女性によって落とされている男性の姿が露見し、都市化における女性の台頭が、社会の傾きであることを表現している」と述べているように、『燃えつきた地図』における女性の登場人物もまた、男性を誘惑する存在としての側面を帯びている⁽¹¹⁾。このように、1960年代以降の作品における女性登場人物は両極の評価を呈示している。しかし、その評価の一端である〈女性が男性を誘惑する〉という特徴は、前述のように本論文の考察対象で

(7) 同上、p.155。

(8) 磯貝英夫「〈砂の女〉の女」『国文学 解釈と教材の研究』1969年10月、p.227。

(9) 鳥羽耕史「安部公房「砂の女」——性的な戦略について」『国文学 解釈と鑑賞』第73巻第4号、2008年4月、p.126。

(10) 安部公房は失踪に関する自身の作品について、「失踪に対して、すぐに回復ということを持出すことに、非常に疑念があるのです。一応三部作という形で、失踪前駆症状にある現代を書いてみましたが、この次は、すでに失踪してしまった状況で、失踪の向こうにある世界を書いてみたい」(「私の文学を語る」『三田文学』1968年3月号、『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.45)と述べている。この記述以降、『砂の女』、『他人の顔』、『燃えつきた地図』の三作品は「失踪三部作」と称されるようになったのである。

(11) 藤井里菜「安部公房『燃えつきた地図』論——都会が生み出した女性像」『清泉語文』第2号、2012年3月、p.255。

ある『鴉沼』をはじめとした、安部公房の1940年代の作品の普遍的テーマの一つでもある。

『鴉沼』は『思潮』1948年8月号に掲載された安部の短編小説で、作品の概要は次のようになっている。敗戦直後の満洲にある町で、結婚式を迎える日本人「娘」はかつての恋人である「男」と出会うことになる。二人が逢引を約束したその夜、「娘」の住処は暴徒と化した満洲の住民によって焼かれてしまう。この動乱の次の日、「娘」は内面の葛藤を経た上で、全てを捨てて過去の恋人と駆け落ちすることを決心する。しかし、「男」はこの動乱の中で負傷し、「鴉」の群れに片目を取られて発狂してしまう。発狂した「男」は「娘」の首を絞めて殺そうとしたが、「娘」に押されて沼の中に落ちたあげく死んでしまう。

この小説に関する希少な先行研究の中、「安部の日常性に対する考え方、すなわち、『満洲国』における日常の世界観は精神的な抑圧によって成立していたのだという認識を確認できる」という波瀾剛の論述は、日本人引揚げ者の異常な行為と、「満洲国」という複雑な空間との因果関係を指摘したことで有意義である⁽¹²⁾。この時期の安部は、満洲を題材とする作品を他にも刊行しているが、この『鴉沼』は異色をなすものと言える。たとえば『終りし道の標べに』(1948)という作品は、満洲を舞台とする長編小説と言われているものの、実存哲学が多様に反映されているために、小説的性格よりも「哲学論文」の性格が強い⁽¹³⁾。また、山田博光が「小説的構成はそれほど意味あるものでないかもしれない」と指摘したように、該当時期の作品において、小説の構成は重要視されていなかったと考えるのが妥当であろう⁽¹⁴⁾。

しかし、『鴉沼』のテキストでは、実存哲学の占める割合は小さく、その反面、男女の不貞行為、つまり〈姦通〉という行為が、暗喩のレベルであるものの小説の構成として重要な機能を果たしているように思われる。尚、この〈姦通〉とは、広義的には男女が不倫関係を結ぶことだが、狭義の意味では、夫を持つ妻が他の男性と関係を持つことを指す。この狭義の〈姦通〉概念は、前述にあったように、安部の初期作品にみる「盗人」——婚姻関係中の妻が他の男性を誘惑する——という言葉の意味合いとも一致する⁽¹⁵⁾。

事実、この〈姦通〉という不貞行為は、東西を問わず近代文学において最も普遍的なテー

(12) 波瀾剛『越境のアヴァンギャルド』NTT出版株式会社、2005年7月、p.226。

(13) 安部公房は『終りし道の標べに』について、「二十三歳で書いた処女作『終りし道の標べに』は、小説を書いたつもりじゃなかった。哲学論文みたいなもの」(『新人国記'82 外地②——現代の先端を行く』『朝日新聞』1982年10月4日、『安部公房全集30』新潮社、2009年3月、p.676)と評している。

(14) 山田博光『『終りし道の標べに』』『国文学 解釈と鑑賞』第36巻第1号、1971年1月、p.78。

(15) 1908年(明治四十一年)に改正された刑法によれば、「姦通罪」とは、妻が姦通した際、夫は妻とその姦通相手を告訴することが可能だが、逆の場合、夫が姦通しても妻は夫を告訴できないということになっている。戦後の憲法で男女平等が実現できたために、「姦通罪」自体は廃止され、1972年に改正された民法において、配偶者に不貞行為があった際、どちらも離婚の告訴が可能となったのである。ただし、川西政明が「これで姦通は刑法上罪にならないことになったが、この姦通罪を支えてきた精神が日本人の生活から一掃されたわけではない」(『文士と姦通』集英社、2003年3月、p.10)と指摘しているように、狭義の「姦通」概念、つまり婚姻関係の中で、妻の不貞行為のみが「姦通」と認識されることは、日本人の脳裏に深く烙印されているこの「姦通罪」の影響によると思われる。

マの一つでもあった⁽¹⁶⁾。ただし、日本近代文学の場合、〈姦通〉の場面は明確に描かないのがある種の暗黙の了解となっている⁽¹⁷⁾。本論文における〈姦通〉の概念は、明確な性的および肉体関係を前提としているのではなく、アレゴリーとして広義的な意味での男女間の不倫行為を指している。これはたとえば、『鴉沼』で〈姦通〉と思われる行為は以下のように仄めかされている。

娘には逢いびきの約束があったのだ。時刻は昨夜、場所は鴉沼。娘が男に出逢ったのは一昨日、駅前の中央市場の中だった。

娘は心持ち蒼ざめ、自分でも血の気が失せていくのを知った。と忽ち逆に紅潮するのを感じた。長いあいだ心に描き、あまりにも永すぎたため却ってほとんど忘れ去っていた十年ぶりの再会ではなかったか。[…]娘は息をこらして男を見上げた。一瞬嵐のような不安と期待が言葉と肉体をつなぐ部分、二人の心臓の間で音をたてた。(下線引用者、以下同)

下線の「紅潮するのを感じた」と「言葉と肉体をつなぐ部分」という表現は、比喩のレベルで二人の肉体関係を示唆し、〈姦通〉の成立を物語っているように思われる。ここで注目すべきは、作品冒頭において、この〈姦通〉行為を積極的に推し進めるのは、「男」側であるという点である。

憎しみに変形していく愛を支えてくれるのは君だけ、今夜鴉沼で、それ以外には考えられない。待つてゐるよ。いいんだ。返事はいらぬ。そうする以外には方法がないということを知ってもらえばそれでいいんだ。(傍点引用者、以下同)

引用に示されているように、小説の序盤では、この「男」は女性を強引に求めようとしている。おそらく、「男」の強気を支えているのは、健全な男性性という本来男性に付与された権力と言えるだろう。しかし、この「男」が負傷した後のテキストを辿ってみると、男性と女性の力関係は逆転し、その権力構造は一転を見せ始める。

哀願するような弱々しい声だった。[…]そしてその手は首へ、はっと思った時娘は首を強くしめ上げられるのを感じた。何も彼もが余りにとう突すぎる。強い眩暈い、驚愕、衝激。叫び声をあげながら娘は反射的に強く男をはねのけた。[…]意外なほど脆く男は手を離すと、水の底を歩いていくようにゆらゆらと体をふりながら二三歩後ろによろめいて行く。

(16) トニー・タナー著、高橋和久、御輿哲也訳『姦通の文学 契約と違犯 ルソー・ゲーテ・フロベール』朝日出版社、1986年6月、p.31。

(17) 川西政明『文士と姦通』集英社、2003年3月、pp.205-206。

引用部では、「弱々しい声」で「哀願する」「男」が「娘」の首を締めようとしたが、「娘」に反撃される経緯が描かれている。「意外なほど脆く」という言葉にあるように、負傷後の「男」の身体が衰弱していることによって、ここでは男性と女性との力関係が逆転してしまったという結果が示されている。これによって男性があらかじめ持っていたはずの優位性は喪失し、女性に対する男性固有の権力を喪失した「男」は、「娘」との〈姦通〉の可能性を徹底的に失うこととなった。この「男」が主導権を握る〈姦通〉行為の失敗に関しては、「鴉」からの攻撃で視力を失ったことが重要な要因となっている。下記の箇所はその一部始終を書き記している。

沼のほとり、鴉の飛び立ったあと、しばらく置き忘れていた男を見てみよう。男は苦痛に身もだえている。死んではいなかったのだ。丁度いま肉体の場所を感じることが出来ぬほどの痛みに叫び声をあげて目覚めたところだった。痛いといえば、とりわけ左の眼、鴉についばまれて破れた眼。

前文で分析したように、この引用にある「肉体」という言葉自体、「男」と「娘」の〈姦通〉を表象するものである。したがって、ここでの「肉体の場所を感じるが出来ぬ」という一節は、「男」の男性性の欠如を意味した上で、〈姦通〉の不可能性を示唆しているように思われる。また、この「男」の身体の負傷とは、「痛いといえば、とりわけ左の眼、鴉についばまれて破れた眼」にあるように、具体的には目が潰されたことを指している。

そして、この登場人物の目が「鴉」に潰されるというエピソードは、おそらく安部公房が愛読したエドガー・アラン・ポーの『黒猫』(1843)に由来すると考えられる。また、『鴉沼』という小説のタイトル自体も、ポーの『大鴉』(1845)にインスパイアされたのではないかと予測できる⁽¹⁸⁾。なぜならば、『黒猫』において猫の目を抉り取る行為を去勢の代替行為とする認識とも酷似しており、この「男」の目が「鴉についばまれて破れた」行為も、ある意味で去勢の代替行為と言えるかもしれないからである⁽¹⁹⁾。

つまり、「男」の身体上の欠陥=去勢されたことによって、この「男」は「娘」との〈姦通〉の可能性を徹底的に喪失したのである。こうした推論を踏まえて、「男」と「娘」にまつわるこの〈姦通〉のアレゴリーに、さらなる深い象徴性を見出せるのではないかと考えられる。

(18) 安部公房は自筆年譜の中で、エドガー・アラン・ポーについて「中学時代に、『世界文学全集』を読み、とくにポーに強い印象をうけ、学校の昼休みに、級友を集めて話し、好評を得たりした」(「年譜」『新鋭文学叢書2 安部公房集』筑摩書房、1960年12月、p.277)と述べている。

(19) フロイト著作のフランス語訳者で、エドガー・アラン・ポーの作品に関する精神分析研究で有名な学者、Marie Bonaparteは、『黒猫』における一匹目の黒猫の片目をえぐりだす行為が去勢の代替行為であると指摘している。『The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation』, trans. John Rodker (Lodon: Imago Publishing, 1949) pp.468-470.

二、帝国と植民地の象徴性

前節では『鴉沼』における「男」と「娘」の〈姦通〉行為について分析した。本節ではテキストにおいて表象されている登場人物の〈姦通〉行為の象徴性について考察してみたい。まず注目すべきは、「娘」を誘惑する男性のアイデンティティの複雑性である。「男」と「娘」が再会する場面で、「男」は自身のことを次のように紹介している。

もう十年も遇わずにいたんだもの、隊が解散して復員したとき、僕はほとんど生きる目的を失っていた筈なのに、却って今まで味ったことのない生命力を感じて驚いたりした。[…]むろんそれも承知の上で君が来ていると噂に聞いていたこの町にやって来た。丁度機関区に務めていた友人が知恵を貸してくれて、上手く軍用列車の火夫になりすませたのさ。

引用部にあるように、「男」は長い間、帝国日本の軍人であったことを「生きる目的」としてしている。また、「男」が「軍用列車の火夫」の身分で「娘」と再会していることを考慮すれば、この「男」は小説中で語られている過去から現在までずっと軍人というアイデンティティを持っていたと言えるかもしれない。言い換えれば、この「男」は、戦前や戦中の旧日本軍を象徴しており、ひいては軍人を駆動する帝国主義自体を示唆しているように思われる。「男」のこのような象徴性を考えるに際して、下記の箇所注目してみる。

すでに舞い上り不眠に興奮している一羽の鴉が融けかけた沼のほとりの枯草の中に若い男が倒れ伏せっているのを目ざとく見つける。恐らく昨夜モップに追われて逃げてきたのだろう。「…」いきなり羽をすぼめて緻密な朝の大気をつきさすように落ちかかりその眼球をついばんだ。破れた角膜から血のにじんだ半透明な粘液がもくもくと湧きあふれる。

上記の一節によれば、「男」の満身創痕は「モップ」の襲撃と「鴉」の攻撃によるもので、この箇所にもみ焦点を当てれば、「男」は暴行を受ける側、すなわち被害者と設定されていることがわかる。しかし、この「モップ」の由来を遡れば、そこには複雑な事情が絡んでいたように思われる。

一発の狼煙が合図だった。一九四五年、あの忘れ難い九月の暮れ、旧市街の一角からけたたましい太鼓の音が湧き起った。笛がなりあえぐような群集の叫びが城門を打ち倒し、しっ黒の中にきながら息をこらす敗れた人間の町を目掛けてつき進んだ。不具者と病人と気狂いとが火薬の臭いに酔った夜、モップの夜。手榴弾が破裂し、人々の衣は石油に濡れ、火がついた。しかしこげた指でも太鼓は鳴る。かすれたうめきも集れば立派に叫ぶ。沼は笑い、まだ夜だというのに鴉たちも目を覚ました。妖怪のように美し

く鳴き、沼をふるわして黒く羽ばたいた。何千という白い眼がモップの投げた火に濡れて瞬いた。ああ、復讐の日が来たのであろうか。

「モップ」とは、英語の「mob」という単語の意味で使われており、主に暴力を駆使する群衆や、無秩序に集まった騒がしい群衆を指し示している。ここから『鴉沼』での「モップ」という表現には、引用部に示されている通り、〈暴徒〉の意味合いが込められていると推測できる。たとえば、「手榴弾が破裂し、人々の衣は石油に濡れ、火がついた」という一節からも、ここでの「群集」が暴徒へと豹変することで、「モップ」という小説内の言葉は暴力と結びつくのである。

ただし、「1945年、あの忘れ難い九月の暮れ」に留意すれば、小説中の時間帯は旧日本政府が既に敗戦を宣告した後の時期に設定されていることがわかる。つまり、この「敗れた人間」とは、戦前や戦中の満洲へ送られた開拓民であり、物語内の時期にあわせれば、日本政府による引揚げを待つ〈引揚げ者〉のこともである。つまり、「モップ」対「敗れた人間」という物語内の対立構造は、物語外における満洲の中国人対日本人引揚げ者という現実の対立構造を反映している。

したがって、こうした「モップ」という暴徒の暴力的活動は、物語中では「敗れた人間」への「復讐」として描かれているものの、これは敗戦後の元植民地で発生した歴史的事実、すなわち、今まで抑圧されてきた植民地の人々による敗戦後の日本人引揚げ者への復讐行為を示唆しているのだろう。また、「何千という白い眼がモップの投げた火に濡れて瞬いた。ああ、復讐の日が来たのであろうか」という一節については、「モップ」という満洲の中国人が「鴉」と同一視されており、「モップ」の復讐がそのまま「鴉」という動物の復讐と重なるように描かれている。このように両者が同一視されている偶発的な設定は、事実上、作品の冒頭からすでにその必然性が暗示されている。

新旧両市街を隔てて一里四方にひろがる赤土の草原。湿地帯を避けて敷かれた鉄道がこんな片輪な町を拵えてしまったという。[...]その草原の中に原生動物さながら不規則な枝を出してはりついているほそ長い沼がこのまわり道を余儀ないものにしていくのだ。しかし植民地特有の膨大な重工業発展は、この隔りを直線化する必要にせまられていた。数年後には理想的な鉄の道路がこの草原を横切り、この一帯は完備した緑地帯になり、沼には白いポートさえ浮ぶはずであった。

この小説冒頭部の引用で、「植民地特有の膨大な重工業発展」とは、植民地空間への改造を指す。しかし、この改造はまた、〈満洲での中国人の生活空間を排除する〉という、侵略行為や支配統治も同時に示唆している。また、「沼には白いポートさえ浮ぶ」という言葉が意味する生活環境の改善からは、確かに満洲での日本人に利便性を提供していることがうかがえるものの、こうした環境の改善によって「鴉」の棲家である「沼」を破壊し、「沼」から「鴉」

を駆除する結果をもたらすこととなることから、いわゆる満洲の自然破壊でもあった。したがって、「鴉」も満洲の中国人と同様に、占領側の日本人入植者に支配統治され、その抑圧に対して同等の憤りを実感しているために、このような入植者たちに対して、中国人と共通する復讐心をもっていたと考えられる。

であるならば、満洲の自然を象徴する「鴉」と「モップ」と化した中国人が力をあわせて、戦争中の日本軍を象徴する「男」と、日本人引揚げ者を指し示す「敗れた人間」を、協力して負傷させるまでの経緯は、まさに敗戦直後の帝国日本の軍人と一般邦人が、旧植民地や元占領区の民衆に逆襲された歴史を忠実に再現しているといえることができるだろう。

この「男」との遭遇が、第二次世界大戦直後の帝国日本が直面した歴史的事実の示唆であることを見出した以上、〈姦通〉の主導権を失ったこの「男」が、〈姦通〉相手の女性——従来弱者とされてきた「娘」に殺されたことにも、やはり何らかの特別な意義が孕んでいよう。

そこでまず、「男」と対立項をなす「娘」の象徴性を追究する必要がある。

丁度そのころ、別な世界からこの鴉の叫びと黒い渦の柱を気遣わしげに眺めているものがいた。新市街から草原中途までのびて来ているアスファルトの道を沼の方へ歩いていて、広い額から眼のまわりに黒く疲れを漂わせているうら若い娘であった。[…]むろん彼等の目的は沼ではない。彼等は賢明にも都市の発展を見越し選りも選って鴉沼に近く、やっと沼から続く草原と丘の波がつきるこのあたりまでのびて来た道路にそって建てられた侘しい三棟の住人なのだ。そしてまず手始めにとモップに打たれ追われてやっと生き残った十一人であった。

引用にあるように、「モップに打たれ追われてやっと生き残った十一人」の中に、この「娘」がいたのである。「娘」は、「別な世界からこの鴉の叫びと黒い渦の柱を気遣わしげに眺めている」ために、彼女が植民地で暮らす一般の日本人市民とは異なる「別な」存在であったかもしれない。事実、「娘」だけでなく、「彼等は賢明にも都市の発展を見越し選りも選って鴉沼に近く、やっと沼から続く草原と丘の波がつきるこのあたりまでのびて来た道路にそって建てられた侘しい三棟の住人なのだ」という下線部にも着目すれば、「見越し選りも選って」や「侘しい」といった言葉に示されているように、昨夜の暴動から生き残った「十一人」で構成されているこの小共同体は、「新市街」に住んでいる多くの日本人集団とは異なる特殊な存在としての小共同体であると察することができる。

ただし、ここで留意すべきは、この小共同体の住処である「侘しい三棟」の建設過程において、〈植民地主義〉という概念の痕跡を見出すことが可能であるという点である。

その草原の中に原生動物さながら不規則な枝を出してはりついているほそ長い沼がこのまわり道を余儀ないものにしてしているのだ。しかし植民地特有の膨大な重工業発展は、この隔りを直線化する必要にせまられていた。[…]事実その歴史的な大工事は新市街

の側から一部始められ、沼を囲むように波打っている丘陵近くにも二三軒の家が建てられていた。

「娘」を含むこの「十一人」が暮らす場所は、引用に示されている通り、満洲に移住した日本人が「重工業発展」という経済的な理由によって、「新市街」から距離を置いたところであり、新しく開拓した空間である。言い換えれば、「娘」を含むこの小共同体は、都市開発の最先端を走る人間であり、経済発展のためにかつての居留地から離れた場所で、新しい居住地を作り上げた集団でもある。エドワード・サイードによれば、『植民地主義』というのは、ほとんどいつも帝国主義の帰結であり、遠隔の地に居住区を定着させることであり、「経済は海外市場や原材料や安価な労働力や膨大な収益のあがる土地をもとめてやまなかった」とされる⁽²⁰⁾。この理論に沿うかのように、「沼」の近くに住む「娘」を含むこの小共同体の形成は、まさに帝国化に伴う必然的な結果の一つである〈植民地主義〉そのものを示唆している。「娘」に植民地主義の象徴性が見出されるならば、この「娘」が帝国主義を象徴する「男」に反撃する裏には、何か重大な歴史的事実が隠されているかもしれないのだ。

ぼんやり眼を上げたものの娘は何も理解していない。まっ先に駆けつきたいいなずけの腕に支えられて立上って見たが、肉体を支配する力さえ失ったらしく手をゆるめられると融けるように崩れてしまう。

物語の最終場面で、「娘」は「いいなずけ」——暴動から生き延びた「十一人」のうちの一人——に支えられながら、「肉体を支配する力さえ失ったらしく」、「融けるように崩れてしまう」と描かれている。前述したように、「娘」をはじめ、この生き延びた「十一人」は、植民地主義を象徴しており、帝国主義を象徴する「男」から「いいなずけ」の元に戻った「娘」の結末は、帝国主義との関係を完全に断ち切っただけでなく、植民地主義自体も「支配する力」を喪失し「崩れて」いかにざるをえない、という歴史的事実を指し示しているのかもしれない。また、たとえ故意ではなかったとしても、この「娘」は確かに「男」を「沼」に押し付けて殺害した。こうした行為は、帝国主義が必然的に植民地主義の拡張をもたらすものの、その拡張によって最終的には帝国主義自体が終焉を迎えることになる、という別の歴史的事実を示唆しているのではないだろうか。

このように植民地と帝国に関わる複雑な歴史が、テキストに反映されている理由の一つに、安部公房の満洲での複雑な実体験を挙げることが可能であろう。たとえば、安部には「毎日のように、(奉天の、引用者)旧市街の城内を、冒険して歩いた」といった記述があり、こうした記述がそのまま『鴉沼』のテキストに反復されていることは、この作品の背後に作者の実体験がなんらかの影響を与えていると言えよう⁽²¹⁾。作家自身の経験を小説で描くことに

(20) エドワード・サイード著、大橋洋一訳『文化と帝国主義1』みすず書房、1998年12月、pp.39-40。

(21) 安部公房「年譜」『新鋭文学叢書2 安部公房集』筑摩書房、1960年12月、p.277。

については否定的に考えてきた安部だが、本作は『けものたちは故郷をめざす』(1957)と似て、作者の実体験を踏まえて描かれたものであることは否定できない⁽²²⁾。

次節では、安部の引揚げに関する認識が、テキストの多様な象徴性と如何に関連しているかについて考察を試みる。

三、〈群衆〉と引揚げ

ここで改めて『鴉沼』に登場する「モップ」という存在に着目したい。実は、この「モップ」という言葉が安部の同時代の作品において反復して使用されていることは注目に値する。たとえば、前述した『〈歴史の頁が〉』には以下のような記述が見られる。

急行列車の専務車掌をしていたウラは夢から覚めかけていた。窓の外を餓え怒りにみちた数千の中国人群衆が、打ち鳴らす太鼓の音を先頭に、警察官舎めがけて雪どけの溪流のようにしぶきをあげてゆく。手榴弾の炸裂する音、もえ上る火……[……]そのモップのリズムだけが手にふれ目に見える敗戦だった。⁽²³⁾

上記の引用部では「群衆」としているが、ここでの「群衆」の暴力的行為は、『鴉沼』に見られる「群集」(『鴉沼』では「群集」と表記されている。)表現と共通している。ただ、『鴉沼』のテキストでは、二つの群衆が見られ、一つは「娘」や「男」が代表する入植者たちのそれであり、作品が語られた時点では住所を破壊され、身体が傷付けられた日本人引揚げ者から構成する群衆である。もう一つは、入植者に抑圧された満洲の中国人によるもので、作品が描かれた時点では「モップ」となって日本人引揚げ者を襲撃する群衆である。また、「鴉」という動物の集合体も、二つ目の群衆のメタファーとして同一視されている。加藤弘一によれば、『鴉沼』に登場する「群集」は、安部公房に影響を与えたブルガリア出身のユダヤ人作家、エリアス・カネッティの「群衆論」と緊密な関係を持つ⁽²⁴⁾。カネッティはその著作『群衆と権力』(1960)の中で、「群衆」の形成に関して次のように語っている。

以前には影もかたちもなかった場所に、忽然と現れる群衆というものは、神秘的な、しかも普遍的な現象である。最初は少数の人間が立っただけかもしれない——五人か一〇人か十二人、それ以上ではない。何も予告されてはいなかったし、何も予期されてはいなかった。突然どこもかしこも黒山のような人だかりとなる。四方八方から

(22) 安部公房は満洲での体験を次のように語っている。「ぼくが育った奉天市の南の境界は、雨期ごとに氾濫する渾河という大きな河の堤防だった。その堤防と鉄道線路がまじわるあたりに、大きな沼があり、その沼全体が、市のゴミ捨て場になっていた。[……]もっとも、中心部を覆っていたのはゴミではなくて鴉だったのかもしれない。夕暮、その沼の表面をめぐり上げるようにして、何千羽という鴉が舞い上るのを見たような記憶もある」(「シャボン玉の皮——周辺飛行23」『波』1973年9月号、『安部公房全集24』新潮社、1999年9月、p.417)。『鴉沼』の舞台はおそらく安部のこうした満洲体験をモデルにしている。

(23) 前掲、安部公房(1997年)、pp.145-146。

(24) 加藤弘一「解説」『(霊媒の話より)題未定 安部公房初期短編集』新潮社、2013年1月、p.294。

他の人びとが、まるで通りという通りが全部そこへ向っているかのように、殺到してくる。多くの者は一体何が起こったか知る由もなく、尋ねられたところで返事のしようもない。だが、かれらは他の大多数の人びとがいる場所へ急ぐのである。[...]群衆は、その発生する場所、そのもっとも内部的な核においては、外見ほどには、必ずしも自然発生的とはいえない。しかしながら、実際に群衆をつくった五人か一〇人か十二人の人間を除くと、群衆はどこでも自発発生的である。⁽²⁵⁾

カネッティの『群衆と権力』によれば、群衆の形成において、まず核となる「少数の人間」が必要で、その数は「五人か一〇人か十二人」である。『鴉沼』において、日本人引揚げ者の群衆の場合、その核心となる人間はすでに述べたように、「生き残った十一人」である。そして中国人の場合、「笛がなりあえぐような群集の叫びが城門を打ち倒し、しっ黒の中にきながら息をこらす敗れた人間の町を目掛けてつき進んだ」という一節にあるように、ここでの中国人群衆は、カネッティが「四方八方から他の人びとが、まるで通りという通りが全部そこへ向っているかのように、殺到してくる」と語っている「群衆」の特徴と一致している。つまり、『鴉沼』に登場する二つの群衆は、ともにカネッティの『群衆と権力』で言及されている「群衆」の痕跡を思い起こさせるのである。

これは実際に、『鴉沼』や『〈歴史の頁が〉』という二つの小説だけでなく、石橋佐代子の考察によれば、安部公房の『壁』(1951)に収録されている作品の大半に、このエリアス・カネッティの「群衆論」の痕跡が見られるという⁽²⁶⁾。また、安部自身もそのエッセイにおいて、カネッティをカフカと並んで、自身に多大な影響を与えていた人物と告げてもいる⁽²⁷⁾。とりわけ、安部公房の「共同体」に関する思考の基盤は、カネッティの理論にあると考えられる。

共同体というものには、自分たちが連帯をつくるという機能と同時に、敵をつくって何かを排除するという作用があって、その排除作用を強化することで内側を固める。

(25) エリアス・カネッティ著、岩田行一訳『群衆と権力(上)』法政大学出版局、1982年1月、p.5。

(26) 石橋佐代子は安部公房の『壁』を対象に、エリアス・カネッティの『群衆と権力』と照合しながら、「『S・カルマ氏の犯罪』も同様に、名刺(一つ)を中心にした身のまわり品たち(九つ)によって、攻撃目標を偶然的犯罪者ばくとして、群衆が形成される。[...]『バベルの塔の狸』では、狸に影を取られたばくが、目だけを除いた透明人間になると、目を追う人々が押し寄せ、警察もラジオも巻き込んだ群衆となる。『洪水』には、群衆は形成されないものの、労働者を手始めにどんどん液化し洪水をなす人類が描かれる。洪水は、E・カネッティの群衆シンボルと見做せよう。『事業』は、何んの値打もないような人間共が、事業主の私におびきよせられ、自発的に(死の)群衆を形成していく予感が描かれる」(「安部公房文学にみる『群衆と権力』——『壁』を中心に F・カフカ、E・カネッティと——」『名古屋近代文学研究』第17号、1999年12月、p.60)と指摘している。

(27) ガルシア＝マルケスを賞賛する際、安部公房は「マルケスの魅力は、まずどここの作家というような所属の括弧からはずれたところにあると思う。あえて所属を言うならむしろ時代でしょう。空間より時間、地域よりも時代に属する作家なんだ。[...]よく知られているところでは、ブレヒトであるとか……それからエリアス・カネッティも、やはりその周辺に位置づけられる。もっと輪を広げればフランツ・カフカなんかも含まれる」(「ガルシア・マルケスをめぐって」『イベロアメリカ研究』第5巻第1号、1983年4月、「地球儀に住むガルシア・マルケス」『安部公房全集27』新潮社、2000年1月、p.124)と述べている。この無所属性の文学的特徴は安部文学の特徴とも言われており、こうした中で、エリアス・カネッティの観点も国家を超えた普遍性を孕むために安部を惹きつけたのかもしれない。

だから、ある段階で弱い共同体を急速に固めようとする、固めることよりも排除するシステムを強化するわけです。たとえばナチスがそうでしょう。ユダヤ人を排除する、非アリア民族を排除する、という形をとって凝縮をさせていく。⁽²⁸⁾

引用部に示されているように、安部はここで、「共同体」を「固めよう」とするには、「排除するシステムを強化」しなければならないと述べ、「ナチス」という「共同体」の形成プロセスが「非アリア民族」の「排除」を伴うことを否定的に評価している。この安部による「共同体」についての思考様式は、『群衆と権力』で言及されている理論と緊密に関わっているように思われる。

群衆にとって自らを保持しうるもっとも確実な——しばしば唯一の——可能性は、群衆が相互関係をもつ第二の群衆の存在にある。二つの群衆が競技において競争者として競いあうにせよ、お互いに対する重大な脅威として敵対しあうにせよ、第二の群衆の姿を見たり、あるいはただ第二の群衆のことを思い浮かべるだけでも、第一の群衆の崩壊は食いとめられる。⁽²⁹⁾

引用箇所を示されているように、カネッティによれば、群衆が「保持しうる」ためには、「第二の群衆」という対立した存在が必要である。とりわけ「お互いに対する重大な脅威として敵対しあう」にあるように、この「第二の群衆」とは「競争者」といった「敵対」関係でなければならない。したがって先述した通り、カネッティの「群衆論」は、安部がこの時期に考えていた「共同体」思想の基盤になっているとすることができるだろう。

尚、カネッティの『群衆と権力』で呈示されている「群衆論」は、安部公房の有名なエッセイ『内なる辺境』(1968)を代表とする1960年代の諸作品を中心に反映されているが、実のところ、1948年の『鴉沼』のテキストにもカネッティの理論が反復されているように思われる⁽³⁰⁾。たとえば、『鴉沼』において、日本人引揚げ者群衆と中国人群衆は、まさに敵対する二つの群衆でありながら、互いの存在と矛盾によって、「自らを保持しうる」ことになっている点に注目する。具体的には、暴動から一夜が明け、日本人引揚げ者の群衆が次のような結末を迎えている場面を引用する。

見るかげもなくおとろえた十一人が、一塊りになってよろよろと丘の背を越えたとき、丁度太陽が色彩をつき破って大地に光を投げかけた。その確実な復帰に鴉たちが歯を

(28) 安部公房「根なし草の文学」『波』1969年9・10月号(『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.350)

(29) 前掲、エリアス・カネッティ(1982年)、p.78。

(30) 安部公房は「内なる辺境」の中で、〈群衆〉形成についてカネッティの観点を援用しながら、「一般民衆が、自然自発的に反ユダヤ思想を持つに至るなどということはありません。煽動者なしに——その野心的な働きかけなしに——ファシズムが成立つなどと言うことは、絶対にありえないのだ」(『内なる辺境』『中央公論』1968年11月-12月号、『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.221)と述べている。

むき出して叫ぶ。そしてたちまち数千の群が黒い渦になって西の空に舞い立った。

下線部に注目すると、「一塊り」という言葉は、恐怖の一夜を共に過ごした引揚げ者たちが、この時点では逆に強固に団結している状態を示している。また、「確実な復帰」という言葉も、苦難を乗り越えた引揚げ者たちが、この「大地」において永遠とまではいかないものの、ある程度以上のスパンがある前提で一時的に生活の継続が可能であることを示唆している。このように満洲の中国人群衆との対立と衝突を経た上で引揚げ者たちが迎えたのは、その群衆の消滅ではなく、むしろ依然とした群衆の「保持」という結末である。

同様に、『鴉沼』に描かれているもう一つの群衆、満洲の中国人＝「モップ」もまた、同じような傾向を示している。

鴉沼が王者の誇りをもって此の稀有の増悪と愛情に慄えたのが、白く泡立つ霧となって湧き始めたのは丁度そのときであった。霧は次第に押し広がり、丘を越え、畑を越え、町々の屋根を越え、みだらに酔い狂うモップの顔までも包み込んでいく。月はかくれ、太鼓の音はにぶり、火事は輝きを失い、人々は足を取られてよろめいた。

上記の引用は、満洲の中国人が暴動を起こした直後の夜を描いたものである。「鴉沼」から発生する「霧」が「みだらに酔い狂うモップの顔までも包み込んでいく」ことは、この時点において、「鴉沼」が代表する満洲の自然と、「モップ」が代表する人間が複雑な集合体となっていることを表しているのだろう。また、「王者の誇り」という言葉に示されているように、この際の「鴉沼」と「モップ」、すなわち満洲の自然と人間は、入植者を襲撃して奪われた土地を取り戻したことで共に勝利を味わっている。言い換えれば、満洲の土地で従来抑圧されてきたこの特別な群衆は、入植者との対抗によって自身の「保持」が得られたということが示唆されているとも表現できよう。

このように、『鴉沼』のテキストには、日本人引揚げ者で構成する群衆と、この引揚げ者を襲撃する満洲の中国人群衆、という二つの群衆が登場する。ただし、二つの群衆の対立は、一方の〈群衆〉の消滅を目的としているのではなく、むしろそれは動的なバランスの中で〈群衆〉自体の存続を求める行為を意味している。したがって、安部は1960年代になって初めてカネッティの『群衆と権力』における「群衆」の諸概念について考え始めたのではなく、おそらく1940年代からすでにカネッティの「群衆論」に近いものを考えていたと言えるかもしれない。

ここで留意すべきは、安部が『鴉沼』の刊行時期の1940年代後半に〈群衆〉理論を考えていた背景に、敗戦直後の引揚げ者の社会状況、つまり600万人以上の帰国者が、重要な〈群衆〉として戦後の日本国内で存続するという状況に、彼の思考の一端を見出せることである。周知のように、安部は生後間もなく満洲に渡り、彼の地で終戦を迎えた後の1946年に日本へと引揚げてきた。安部は自身の引揚げについて語ることは少ないが、その痕跡は多くのエッ

セイから確認できる。

農村と都市というのは、まさに閉鎖された社会と、展開された社会という関係なんだ。だから、都市へ出てきた人はその都市に対する不安感に耐えられない。民話のように、その不安感につけいるのは、ずるいとか、卑怯とか、下司根性だと思ふんだ。そのばく然とした不安感、空虚感、しかも自分がイカリをおろしていたと思つた場所も水草のようなもので、頼りないものだと思つたとき、民話もアスピリンくらいの役目はしてくれるだろう。アスピリンだけならべつに問題はない。しかしやがて民話が自己主張をしはじめる。正統性を要求しはじめるんだ。そして、異端告発、つまり郷土を持たない人間を、“根なし草”として叩くスタイルをとるんだよ。戦争中でも、「愛国心とは何か」というようなことを言っているうちは大したことはないんだけど、そのうちに「非国民とは何か」ときたときに、はじめて“牙”がむき出しになる。しかも、心情的には、まだ日本人の中に郷土意識というようなものは強くある。⁽³¹⁾

引用部では引揚げや引揚げ者といった言葉は出現していないが、「郷土を持たない人間」との表現は、敗戦後に旧植民地での土地を失った引揚げ者と共通している。また、「非国民」との表現も、戦後の引揚げ者に貼られたレッテルの一つでもあったことは言うまでもない。他の引揚げ作家とは異なり、安部は常々より〈作者の実体験の物語化〉というものについて否定的であったがために、自身の引揚げ体験や引揚げ者というアイデンティティを文章化することが少なかった。しかし、「郷土を持たない人間」や「非国民」といった言葉からは、安部公房の言説が引揚げ者の戦後日本社会での位置づけを鋭く指摘していることが読み取れるだろう。

その上で、安部の引揚げ直後に書かれた『鴉沼』に改めて着目すれば、引揚げ者たちの結末はオープンエンディングとして不確定のままであったことがわかる。しかし、「あの壊された三軒の住人達も、いよいよ蒼ざめてうなだれる。[……]生存の無意味さを取戻すことこそ吾等の倅せではなかったか」が示しているように、引揚げ者という〈群衆〉は「生存の無意味さを取戻し」、そこに「倅せ」を覚えたことを予測できる。〈群衆〉の存続を実感した引揚げ者たちだが、「あの壊された三軒の住人達」が最終的に結束を遂げた点に焦点を当てるならば、この時期の彼らは互いに同じアイデンティティを持っていることに気づかされたのである。

さらには、その共同体の結束が強固なものとなった前提が、満洲での中国人〈群衆〉による襲撃であった点についても注目しておきたい。おそらくは、テキストから見出される〈群衆〉の対立による〈群衆〉自体の存続、という思考様式の裏に、引揚げ者たちが本土の日本人に嫌悪されるものの、そこには集団の消滅ではなく、むしろ引揚げ者同士の結束や団結を

(31) 安部公房「問いと答えの間——第一部・問題提起」『海』1969年10月号(『安部公房全集22』新潮社、1999年7月、p.408)

生み出す可能性が孕んでいるのではないか、という安部の願望が隠されているのかもしれない。

このように安部の〈群衆〉に関する思考が引揚げと関わっていることを踏まえれば、不貞の女性が同時に引揚げ者と設定されていることにも、重要な意義を見出すことができる。なぜならば、「盗人」と称される女性引揚げ者が男性引揚げ者を誘惑することは、引揚げ者共同体内部の破綻につながる可能性を帯びるからである。たとえば、前節で引用した『〈歴史の頁が〉』という小説だが、女主人公の「ツダ」は引揚げ船の中で異なる男性を誘惑したあげく、その男性たちの間で生じる衝突について、「どうしてみんなそんなに腹を立てあっているのかしら？」と嘲笑している⁽³²⁾。男性引揚げ者同士のトラブルの全てが、必ずしも全部女性引揚げ者の誘惑に由来するわけではないものの、その誘惑によってお互いに亀裂が生じていることは確かである。

更に、この破綻は道徳の側面から批難され得るのみではなく、「姦通罪」のような法律上の控訴もできるため、そこに生じる亀裂は必然的に引揚げ者の〈群衆〉の団結を破壊してしまうとも言えるかもしれない。言い換えれば、引揚げ者の〈群衆〉内部にこうした〈姦通〉行為が発生すれば、〈群衆〉の合法性、すなわち引揚げ者としてのアイデンティティは根本から揺ぎかねない状態に陥ってしまう。『鴉沼』の「娘」が最終的に抱く自己懷疑がこうした推論を裏書きしているように思われる。

ぼんやり眼を上げたものの娘は何も理解していない。まっ先に駆けつきたいいなずけの腕に支えられて立上ってみたが、肉体を支配する力さえ失ったらしく手をゆるめられると融けるように崩れてしまう。そして娘の顔はもう見違えるほど醜くなっていた。

ここでは「男」を誘惑したあげく、彼を殺害した後の「娘」の状態が描かれている。留意すべきは、「崩れてしまう」や「見違えるほど」といった「娘」の変容を意味する言葉が、語り手によって「まっ先に駆けつきたいいなずけ」の視線から語られた内容であり、また、こうした言葉はある意味で「娘」を否定的に評価していると言える。つまり、同じ引揚げ者を象徴する「娘」と「いいなずけ」ではあるものの、「男」との〈姦通〉を経た「娘」にとっては、道徳と法律の両方においてその正当性が疑わしいものになり、引揚げ者〈群衆〉内部の亀裂が前景化されている。このように引揚げ者を象徴する登場人物のアイデンティティ危機は、そのまま日本へ帰還直後の引揚げ者が直面しているアイデンティティの混乱と一致しているかのようである。そこで、引揚げ者であり、文芸評論家でもある尾崎秀樹の言葉に着目してみたい。

日本人は、ぼくも日本人であるとするならば、無条件で迎えてくれるという甘えがあったんですよ。[…]親戚はいたんだけど、迎えてくれないんだな。[…]欲しいのは心

(32) 前掲、安部公房(1997年)、p.155。

なんですよ。日本人として引揚げて来たんだしたら、日本人として迎えて欲しいという感じがあったわけなんだが、違うんだなあ。[…]ぼくは日本人じゃないのかなあ、という感じね。これはやっぱり、非常に裏切られた感じでした。おれは違うんだなあ、招かれざる人間なんだなあ、と。この実感は三十何年たってもなくなるいな。⁽³³⁾

引用部に示されているように、引揚げ者が帰還した際、彼らを迎えたのは日本という祖国の歓迎ではなく、「招かれざる人間」という感覚を覚えさせるほどの内地の日本人による排除であった。引揚げ者としての尾崎は、「ぼくは日本人じゃないのかなあ」という違和感を抱きながら、自身のアイデンティティの混乱を実感するようになり、日本人でありながら日本人ではなくなってしまうという曖昧な存在と化している自分自身を初めて意識する。これは尾崎秀樹個人の認識と体験ではなく、多くの引揚げ者の普遍的な認識と体験でもあった⁽³⁴⁾。同じ引揚げ者として、敗戦直後の安部もこうしたアイデンティティの混乱を経験した可能性が高く、それ故に不貞の女性引揚げ者という存在がアイデンティティの危機を示唆する、という一連の作品を創作してきたのかもしれない。

以上考察してきたように、『鴉沼』に描かれている〈群衆〉の対立と「娘」の不貞行為は、ともに引揚げ者の歴史的コンテクストと関連しており、安部公房の引揚げ者としてのアイデンティティや引揚げへの認識を反映している。テキストから読み取れる〈群衆〉の対立による〈群衆〉の存続には、引揚げ者という共同体が戦後も日本で存続してほしいという安部の願いが込められているのではないだろうか。と同時に、作品に見られる女性引揚げ者の不貞行為が、引揚げ者同士の内部の破綻を引き起こすという描写には、戦後しばらくの間、引揚げ者の存続状況を不安視する安部の懸念が示唆されているように思われる。

おわりに

本論文では安部公房の短編小説『鴉沼』を対象に、比喩のレベルで語られてきた登場人物の〈姦通〉行為が、植民地と帝国との複雑な関係性を示唆していることを明らかにした。また、このような植民地と帝国との関係をこれほど巧みに設定しながら描くことを可能にしたのは、作者自身の満洲体験と引揚げの記憶であったことを指摘した。

『鴉沼』での登場人物が象徴するものは非常に多様であると言える。たとえば、登場人物である「男」は日本軍人を象徴すると同時に、帝国主義をも示唆している。また、「娘」は引揚げ者を象徴すると同時に、植民地主義そのものを示唆している。したがって、この「男」が「モップ」となった中国人に負傷させられるプロセスと、「娘」の住処が破壊された過程は、そのまま敗戦直後の帝国日本の軍人と民間人が、旧植民地の民衆に逆襲された歴史上に発

(33) 尾崎秀樹「日本の“カミュ”たち 「引揚げ体験」から作家たちは生まれた」『諸君』第11巻第7号、1979年7月、p.208。

(34) 本田靖春は引揚げ体験を持つ芸術家の話をまとめ、こうした日本人引揚げ者として、本土の日本人から排除される違和感を「各氏の思い出に色濃くにじんでいるのは、はみ出し者、余計者、よそ者の意識である」(同上、p.208)と述べている。

生じた事件を反映している。また、負傷後の「男」は「娘」との〈姦通〉が不可能となったうえ、「娘」に逆襲までされてしまったことは、植民地主義の過度な発展によって最終的に帝国主義が解体されてしまうという、歴史的な事実を指し示している。このような歴史的コンテキストがテキストで巧妙に再現されている理由の一つに、安部の植民地での実体験を挙げることが可能である。

安部公房における戦後の様々な体験の中でも、引揚げ体験は彼の小説において〈群衆〉というカネッティによる社会学の理論と深く結びついている。『鴉沼』には二つの〈群衆〉が描かれ、一つは「娘」や「男」が代表する入植者集団であり、もう一つは「モップ」となった満洲の中国人集団であった。そして、このカネッティの理論に従っているかのように、二つの〈群衆〉は対立するものの、それは片方の〈群衆〉を消滅することを目的としているのではなく、むしろ〈群衆〉の存続のために働いていると結論付けることができる。

ただし、安部の思考はカネッティの理論が打ち出された以前に提出され、それは引揚げ者たちが排除されながらも、その排除に心折れることなく如何に生存していくべきか、という願望を内実とする思考様式であったと考えられる。さらに、テキストにみる女性引揚げ者が男性引揚げ者を誘惑する設定は、引揚げ者という〈群衆〉内部からの破綻を如実に示しており、その背後には本土の日本人と相容れることのできないという、引揚げ者の正当性そのものが問われているという厳しい現状を見出すことができるかもしれない。

解 放(かい ほう、XIE Fang)

吉林大学

付記

本稿は、東アジア日本研究者協議会第6回国際学術大会(北京外国語大学、2022年11月4日)における口頭発表の原稿を基に改稿したものである。『鴉沼』の引用は『安部公房全集2』(新潮社、1997年9月)に拠る。

参考文献

- 安部ねり『安部公房伝』新潮社、2011年
- 有村隆広・八木浩編『カフカと現代文学』同学社、1985年
- 石田建男「国家へのアンビバレンス——安部公房」『戦後文壇崎人伝』藤原書店、2002年
- 石田雄『記憶と忘却の政治学 同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店、2004年
- 五木寛之・日野啓三「異邦人感覚と文学」『文學界』1975年4月号
- ウィリアム・カリー著、安西徹雄訳『疎外の構図——安部公房、ベケット、カフカの小説』新潮社、1975年
- 小熊英治『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、2002年
- 呉美妊『安部公房の〈戦後〉——植民地経験と初期テクストをめぐって』クレイン社、2009年
- オルデガ・イ・ガセット著、佐々木孝訳『大衆の反逆』岩波書店、2020年
- 高野斗志美『増補 安部公房論』花神社、1979年
- 小久保実「安部公房の満州体験」『国文学 解釈と鑑賞』第40巻第6号、1975年
- ガブリエル・タルド著、稲葉三千男訳『世論と群集』未来社、1964年
- ギュスターヴ・ル・ボン著、櫻井成夫訳『群衆心理』講談社、1993年
- 坂堅太『安部公房と「日本」——植民地/占領経験とナショナリズム』和泉選書、2016年
- 朴裕河『引揚げ文学論序説——新たなポストコロニアルへ』人文書院、2016年
- ヘーゲル著、長谷川宏訳『精神現象学』作品社、1998年
- 松田政男「引揚げ者——〇〇人の告白」『潮』第142号、1971年
- 山田博光「安部公房論序説——リアリズムと共同体」『帝塚山学院大学研究論集』第14巻、1979年
- 若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社、1991年
- 渡辺広士「安部公房と共同体」『國文學 解釈と教材の研究』第17巻第12号、1972年
- 渡辺広士『安部公房』審美社、1976年